

全教神戸市教職員組合との交渉議事録

1. 日 時：令和3年12月22日（水）17:00～19:00

2. 場 所：教育委員会会議室

3. 出席者：

（市）特別支援教育課長、特別支援教育課担当課長2名、特別支援教育課管理係長、教職員課長、教職員課労務制度担当係長、他1名

（組合）執行委員長、執行副委員長2名、書記長、書記次長2名、他5名

4. 議 題：2022年度教育環境整備・労働条件改善に関する交渉

5. 発言内容：

（組）このたびは、こういう場を設けていただきありがとうございます。たくさん支援をいただいていることは分かっているんですけども、現場の抱えている様々な問題を聞いていただいて、生かしていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

まず、新しく設置基準が文科省から出てきたという件で、今まで基準はないということで、基準を作ってくれということ運動してきたんですけども、されることになりました。ただ、それは現存の学校には適用されないということで、今後新しく作られる学校からということなので、是非今ある学校に適用するべく努力していただきたいなという要求が第一です。ただ、神戸市では今年から灘さくらが新設されまして、青陽東が青陽灘になって、多人数化を減らそうと努力していただいていることにはほんとに感謝しておりますし、東灘のほうでは県立が作られるということで芦屋特支に行ってる子たちの教育環境も少し改善されるかと聞いて喜んでおります。ただ、やっぱりまだ青陽須磨とか、友生とか、友生なんか最近新しくしていただいたばかりにもかかわらず、本当に教室がないと聞いております。肢体不自由の重度でたくさんのスペースが必要な子どもたち、それからクールダウンをする場所とか、着替える場所とか、そういう場所を隅々行っているっていう状況が既にあるわけです。もちろん、既にたくさん作っていただいて、新しい灘さくらの施設も見学させていただいて、すばらしいのを作っていただいたなど。新しい今までにはなかったような設備も工夫していただいていることは重々分かっているんですけども、やはり今通っている子どもたちが苦勞している。是非神戸市として、もちろん県立の支援学校との関係もあるかと思いますが、できれば、家に近いところで通いやすい場所で、余り大規模でなく通えるような支援学校、できれば区ごとに一つずつあるような、それぐらいの規模を目指して今からでも計画を立てていただけないかなというのが要求です。

（市）今、特別支援学校の基準ということで、これまでも何度か基準に関しても御要望いただいてましたが、御承知のように国において今年基準が示されました。実際の施行は来年の4月になってます。今回の国の基準に関しましては、もうこれも御存じかと思っておりますけども、校舎とか運動場の面積であったりとか、あと備えるべき施設、自立活動室であったりとか、図書室、保健室とかというふうなことが示されてます。

全国的に言えば、特別支援学校は例えば地域の小学校、中学校を改築して特別支援学校にしてるといった例もあるように聞いてます。県立の学校であったり、市立の学校であったり、その学校によって、通学エリアも違いますし、小・中学校と違って特別支援学校

に関してはほんとにさまざまな例で、神戸市のような知肢併置という形も取ってますので、そういう学校の成り立ちとかによっても違ってくると思います。

その中で今回の基準に照らして今の神戸市の状況を見てみますと、もちろんどの学校も基本的に新しいので、21年に須磨ができました。で、25年には友生です。いぶき明生は平成29年。で、今年灘さくらということで、この約10年ぐらいで4つの学校ができいてます。そのそれぞれの学校に関しましては、当時の指針等に基づいて作っています。ですから、備えるべき施設は十分に備わっています。ただ、先ほど御指摘のあった教室ですね、友生支援学校が今年から灘さくら支援学校のほうに一部変わるようになったんですけども、やはりピーク時と言いますかね。これに関しましても、もともと平成23年のときに、神戸市のほうでいわゆる推計をしまして、ある程度のピークは来て、その後に新設校を作るというふうなことで、計画に合わせた形で児童施設の推移もしてきたというふうに認識しています。

県のほうとの役割分担に関しましても、県との役割分担をさせていただいていますので、支援学校の建設に関しては、この灘さくらと青陽灘が今回できたということになりますので、今後は、その推移でですね、教室の改善と言いますか、環境改善については、改めて学校のほうといろいろ話しながら取り組んでいきたいというふうに考えております。

(組) よろしくお願ひします。

(組) 既存校には、今回の法律は適応されないみたいなことがあって。来年の4月から施行されるわけですから、今ある学校には基本的にはすぐには法律は適応されないということになる。

(市) そうですね。法律附則のほうにはですね、既に設置されてる学校に関しては当分の間基準に寄らないことができるというふうな書きぶりでしたので、全国的に当てはめていったら、なかなか厳しいところはいっぱいあると思いますけども。

(組) もしも、その基準から大きく外れてしまうような実態が市内でも起こった場合は。

(市) 現実的には起こり得ないと思います。よっぽど児童生徒の数が爆発的に伸びないかぎり。国の作っている基準は、備えるべき施設がそもそも備わってないところにもということが前提になってくると思いますので。

(組) 僕も青陽東の時代に、勤めさせてもらったことあるんですけど、僕は音楽なんですけど、生徒が増えて、で、音楽室もホームルームの教室にさせてくれて形で泣く泣く音楽室を明け渡して、入り口のところで音楽をやったりしたケースもあったり。

(市) 青陽東は、今回灘さくらができたことによって高等部のみの学校になって、ちょうど今改修工事をしていますので、新しい学校ということになりますので、改修工事進んでいますので、今まで特別教室、普通教室に転用されてたものは、高等部の学校として新たな使い方ができるというふうになってますので、よろしくお願ひします。

(組) 長坂小学校の特別支援学級の担任の〇〇と申します。よろしくお願ひします。

今年初めて特別支援学級のほうを持たせていただきまして、夏に教科書採択をさせていただきました。で、すごく困ったのが、本の名前とお金だけの情報で教科書を選ぶというのが、基本的に幾らインターネットで調べても中身は分からないというような状況で、じゃあ、会場に行かせていただいて見る。そうすると人がたくさんいて、教科書を奪い合うような状況になっていく。まあ人数が少なければ譲り合いはできるんですけども、

やっぱり人数の割に、置いてある本が少ないっていうか、1か所の場所に一体何人の人が集まっているんだという状況があります。で、正直言って全然分からないのでいろんな本を見ていくんですけど、こんな古い本を誰が選ぶんだろうって思ってしまうような本があったり、ほんとに手探り状態で選んでいく。で、1年目で、子どもたちと接してる期間が短い中で、いろいろアドバイスももらいながら、もちろん選んでいくのは選んでいくんですけども、もう少し何とかならないのかなと。例えば国語で、まだ平仮名を覚え始めてる子には、この本がいいんじゃないかとか、そういう参考資料みたいなものを付けていただけないのかなっていうのが、すごく感じているところです。で、本がないっていうのは、まあいろいろな事情があるのかもしれないんですけども、それが一番いいと思って選んだものがないとなって、見に行ったら、もう同じような本がない。じゃあ、どうしようかというふうに、また困ってしまうところになっているんです。で、何とかそういう困っているところが解消していただけないかなというのがあります。

(市) 初めて特別支援学級担任されて困られたと思うんですけど、この子にとって合ってる一般図書って何だろうというのは、とても難しいのは私もよく分かりますので、きっと御苦労されたのかなと思います。

今年からなんですけども、文科省のほうが大きくこの一般図書の取り扱いが変わりまして、今までだったら文科省のほうから、一般図書一覧の中から探してくださいと。今年は今もう数千冊あるぐらいの、全国で採択された全ての一般図書を、この中から市で勝手に選んでくださいと。そういう方式に変わったんです。でも神戸市としたら、ちゃんと教育委員会会議を経た、ちゃんと神戸市で採択された教科書でなければ、この数千冊の中から好きに選んでくださいじゃ、現場が混乱するだけです。今年度私たちがしましたのが、昨年度まできっちり委員会会議を経て採択されたものを、その数千冊から選んだわけなんです。ところが、12月14日に国のほうから実は、この数千冊の中からこんだけの図書がないんですと。神戸市教育委員会の場合は、10冊程度でしたかね、これがもう取り扱いができないので、それ採択できませんので別のものに変えてくださいと。で、県のほうには、12月28日までに報告してくださいと、そういう文章が来たんです。各校でもうきつとしていただいていると思うんですけども、小・中学校では四、五冊程度。特別支援学校は60冊ぐらい書いていただかなきゃいけないという状態が起こっております。なので余計に今年は驚かれたと思うんですけども。

次年度からどうするかと言いますのは、4000冊ぐらいの中から神戸市の特別支援学級、特別支援学校の中で、この本があればいいなっていうのをアンケート調査を取り、その中から特にニーズがある、人気の高い教科書については、私たちのほうでもしっかりと精査させていただいた上で、また調査、研究をした上で教育委員会会議を経て神戸市の教科書として採択をするように次年度考えております。なので、今年のような混乱は、特に廃盤になってるかどうかっていうのは、もっときつりと精査した上で来年度はやっていこうと思います。

もう1点、図書がないっていうのは、ちょっと検討させてください。よろしく願いいたします。

(組) こんだけの日にちに全市の教員が見に行くので、冊数が少ないし大変なので、是非、何か所かに増やしていただきたいっていうのは、切実な要望なのと、こんな古い時代のを

いまだに採用されるのかなっていうのとか。つながっているのに、ここしかないとか、ほんとに選びにくいし、発達段階によっては選びようがないような教科も出てくる。中学校で選んだら小学校で、中学校でそれは選ばないでほしいなっていうの中学校で選ばれてしまったり。中学校で選んでしまったら高等部の先生困るんじゃないかなってそういうのもありますので、数千冊だったら選ぶのも大変かと思えますけど是非よろしくお願ひします。ありがとうございました。

(組) 先ほどアンケート調査って、どんな感じのアンケートしたのでしょうか。

(市) こんだけ本があるんですけど、で、その中から見ていただいて、算数やったら、この教科書あったらうれしいなっていうのを書いていただく。ただ、本の名前書いていただきました。で、その理由ですね。こういう理由で、この本がうれしく思いますっていうのを書いていただくと。なので、それを書いていただくために、この本をインターネットでもどんなものかを見ていただいたり、本屋に行って見ていただくとか、そういうお手間は掛けることなるんです。しっかり各先生方に見ていただいて、アンケートに書いていただいて、それを集約をして、精査をさせていただくっていうような形を考えております。

(組) そのアンケートを見てもみないと分からないんですけどね、ちょっとイメージしただけでも大変やなというのが、インターネットで見られる範囲って、やっぱりしれてます。やっぱり中身を手に取って見ないと分からない。で、今のお話やったら本屋さんに僕らが実際に行って現物を見るっていうことになると、当然勤務時間外になりますよね。それ勤務時間外に、例えばジュンク堂まで行って、どこにあるのか探して、それを手に取るっていうのは、ちょっとどうなんだろうっていう感じなんです。その4000冊というすごい数。

(市) イメージだとそれぐらい、数千冊単位です。

(組) どういう選び方をするのか、確かに難しい部分はあるんですけど、ある程度市教委さんのほうで絞っていただいたものを、やっぱり現物を見ないと先ほどもありましたように個々の子どもたちの発達ないし障害の程度が違うその子らにどれがふさわしいのかっていうところで、我々やっぱり見に行っているんですね。で、あの実際にその見ているところの様子は御覧になられましたか。

(市) たくさん集まってる場所は見たことはないんですが。

(組) もう、すごいことになっています。で、去年、今年とコロナなのに、こういう状況がほんとにいいのかっていうような状況なんですね。で、これが神戸市で選ぶ全部ですかっていうような非常に、言葉はごめんなさい、お粗末な。

(市) いや、それはこれまでの一般図書一覧が文科省から出てる数その程度だったので、神戸市だけが数が少ないわけではなかった。

(組) 各校やっぱり、自分一人では、ちょっと自信がないというか、どれが合うんやろっていうので、やっぱりみんなで相談し合いながら、各校ほんとに3人、4人来てるんですね。で、それが一角に集まって、で、取ったらまずは自分らの場所に持って行って見る。ほな、もうその本ないんですよ。取りたかったなと思ったけど、持っていかれたので、それが戻ってくるまで、待っているという。だから非常に時間も無駄だし、その選び方に

も非常に問題がある。だからほんまやったら何か所かに分けてとか、あるいは、時間をずらして、もう少し幅を持たせていただいて、我々が勤務時間内に見に行くことができる。で、その時間には、もう最低何校かに絞っていただくとかいう方法を取らないと。

(市) エリアを決めてとか。

(組) はい。でないと結局は、また同じ状況が生まれると思いますので、御検討いただくというお話の中に、その辺りも含めていただけたらありがたいと思います。よろしくお願います。

(市) はい。

(組) 特別支援教育就学援助のことについて、ちょっとお話をさせていただきます。要求の中で特別支援学級児童生徒の就学援助の事務手続き業務を一般就援と同様に教育委員会事務局のほうで行うことを要求したところ、御回答が特別支援教育就学援助については実費支給となる項目が多く、学校側の確認が必要なため、特別支援教育就学援助に関する全ての業務を教育委員会だけで簡潔させることができるものではないということ御理解いただきたいという御回答いただいています。

もちろん学校が確認しないと、例えばどんな教材を選んだのか、児童費からどれを買ったのか、あるいは給食何回食べたのか、泊を伴う行事か、修学旅行に行ったのか、行ってないのか。これはもう学校しかつかんでない情報ですので、もちろんその情報については我々のほうがお出しするのは、もちろんのことだと思うんですけども、基本就学援助事務っていうのは我々教員の仕事ではないと思うんですね。これは、福祉ですよ。大事なものだと思います。特別支援学級を担任していて、その子たちのためになる制度ですので、最大限活用していただきたいと思ひますし、で、特別支援学級じゃない児童でも、この制度を利用してるお子さんもいますので、このせっきくの制度ですから使ってほしいのは分かるんですけども、ただその業務を今の特別支援学級担任でやっているということについて、やっぱりちょっと疑問に思うんですね。例えば募集のための最初のプリントを配る。これは学校でできると思います。そこから希望する人たちが学校にそれを出すんじゃないかと、もう、そこから教育委員会とダイレクトでやり合うということではできないのかということなんです。で、今ちょうど1学期、2学期の教材、何を使ったか、給食費、2学期どれを食べたのかっていうふうなこと、修学旅行のことを1月の始めに締め切りのものを今一生懸命用意しようとしていますけども、で、それを親に配る配り方なんですけどね。イントラのここから自分で印刷して、それを親に渡しなさいという指示が委員会から来ています。それは、僕は違うと思うんですよ。親との間で委員会がダイレクトにやり取りしていただいて、状況についてという問い合わせをいただければ、それに我々は答えるということは十分できるんです。基本親と我々がその就学援助のことに関してやり取りするっていうのは、やっぱりお金の問題ですので、僕らもすごく緊張するところもありますし、間違っって渡してはいけないとか、あるいはやっぱり特別支援の子どもたちやから持って帰らしたつもりやけど持って帰ってなかったらどうしようとか、結構そういういろんなところでの不安な部分もありますので、やっぱり人数的な部分であるとか、急にそれを事務局の中に設けるっていうのも難しいところもあると思うんですけども、何とか特別支援の就学援助のほうもできるかぎり我々現場の教員が事務に携わらないという方向で業務改善をお願いできないでしょうかというこ

とです。

- (市) 今言われたことに対して、いやいや、これはと言うつもりは全くないので。我々の事務もものすごい重要なんです。その事務の中で今言われたような形の、例えば保護者への配り方であったりとか、一番いいのは実費じゃなくて、例えば定額とかね、そういうもとの制度の立て付けが大きく変わればいいんですけど。ただ、これについては国のほうのやり方がありますんで、その中で、昔からやってるやり方をずっと続けてる部分がありますんで、どんなところから変えていけるのかっていう検討は中でもさせていただいてます。ですから一気に無理かもしれないけども事務的なことで少しずつ改善していけるようなところで、あと役割分担等も含めて、今年度は、どちらかという課題を洗い出す。今言われたようなことも含めて、うちのほうの担当者も含めていろいろ状況聞きました。一つ一つやれるところからやろうというふうには今は取り組みはしてますけども、ただなかなかすぐには解決できないという問題はあるということは、もう重々に私自身も承知はしております。
- (組) はい、よろしくをお願いします。
- (組) あと、特別支援コーディネーターの普及をお願いしたいとか、通級を増やして、できれば、その校で通級ができる、わざわざよその学校に行かなければいけないっていうのは、やっぱり子どもの負担が大きいですから、その校で通級ができるよう通級の担当者を増やしてほしいという要求がありますので、是非人員を増やすということを代弁していただきたいと思います。コーディネーターの方はほんとお世話になっていて、親身に相談乗っていただいて助かりました。でも、やっぱりお忙しくてなかなか来ていただけないんですね。是非人員を増やしていただいて、その方たちが有効に動けるようにしていただきたいというのが希望です。よろしくをお願いします。
- (組) 要求書のほうには、あげさせていただいてないことなんですけれども、最近困ってしまったことがあります。私5年生、6年生を担当してるんです。で、6年生のほうもそうですし、5年生のほうもそうなんです、この2年間コロナで進学校のほうに見学に行けてない状況です。で、学校説明会もあったんですけども、保護者からすると写真で見せられただけで、結局進学校がどんなことをしてるかは分からない。悩んだときに相談する先がどこなのかっていうところと、今5年生で困っているのが去年5月、6月に見学会があったのが緊急事態宣言で見られなかった。今緊急事態宣言が出てない。で、すごく迷っているから1回見てみたい。支援学校はどんなところなのか分からないっていうところで、私自身はたまたま特別支援学校の免許を持ち、たまたま教育実習で中学部だったから、ある程度イメージはできるんですけども、保護者は何のイメージもありません。支援学校どんなところなのか。で、6年生で私が担任の保護者同士の話の中で言われているのが、もう賭けやなっていうような状態で支援学級か支援学校選んでるような状況があります。そういうこと聞いたので、校区のいぶき明生のほうに悩んでる保護者がいるんだけど、見学とか相談とかさせていただけないですかっていう話をしたら、5月、6月までは受け入れられないというふうに答えられてしまいまして、どちらが子どもにとっていいのかって真剣に悩まれている保護者に私ができないことがないというのが今あります。でも、そういうことは多分他の学校でもたくさん起こっていると思うんです。何かしらその見学ができない理由があるのであれば、せめて時間割とか、

1週間こんなふうに学習をしているとかっていうことが分かればいいんですけど、明生もインターネットを見ても何も情報がない。学校教育目標を見ても私たちですら、支援学校見たことがないものは想像できないと思うんです。で、私が実習をしたのも10年前になってきますし、そんな情報で進路指導はできないですので、私たちも分からないという状況ですので、資料であったり研修であったりを考えていただけたらと思います。でも、まず、迷ってる保護者に見させてほしいっていうのがあります。で、その市内の支援学校でそれぞれ対応がばらばらなのであれば、そこは統一していただきたいと思います。

- (市) これもコロナ渦で当然御苦勞をかけたところだと思うんです。肢体不自由の最重度の子どもたちがおりまして、どうしてもこれまでやってきたような学校見学をして、教室を周っていただくのはどうしてもできないと。もしもというリスクが高すぎて、命に直結しますので、このコロナ渦できなかったのが、まずは、そっちを優先させていただいたというのがあるので、御不便おかけしたのですが、そういうところもあるというのが1点なんです。

でも、もう仕方がないでしょうということではいけないので、考えられるのは、学校ってどうなってるのというには、これだけ今オンライン、研修もオンラインでできるじゃないですかというのが分かってきたところがあるので、学校見学についても動画で見ていただくとかですね。お母さんだけ見て、家帰って父親にこうやったよって言うんじゃないかって、夜一緒に御夫婦で動画見ていただいたら余計分かりますので、そういう形で対応できるようには考えていきたいと思っておりますので、コロナ禍、どうなるか分からないですが、その代わりになるものはしっかりと作っていききたいと思っておりますので、どうか御理解をいただきたいと思っております。

- (組) よろしくお願ひします。あと一つ、進路指導のことなんですけど、今私中学校で進路指導に携わっていて、今まで中学校卒業した支援学級の子たちで、作業能力のある、学力のある子たちが県立の職業科に抜けていっていたんですね。で、それに向けて青陽須磨さんとか、今度灘支援でもコース別を取って職業科さんと同じようなことができるような高校が打ち出されているかと思うんですけども、卒業している子たちの人数がそこにならないような気がするんです。県立の職業科の定員割れが見られるようになってきました。で、もっと中学校で行っているような、高校で行うであろうその普通科の学習ですね。そんなにその職業訓練に特化しない学習、例えば支援学校卒業でも高卒に準じた資格ではあるんですけども、やっぱり保護者たちは高校過程を勉強したとは思えないというふうに感じますよね。もちろんいろんな障害があるので当然なんですけれども、もう少し、すぐ就職と決めなくてもいいような、もっとこう豊かな勉強をさせたい。後期中等教育を充実させたいっていう思いをこの頃感じて、それがその高卒資格が取れるようなサポート校であるとか、通信制の高校とかほんとうに入ったって、ほんとうに資格は取れるのかとか、就職に変わるんじゃないかと思うようなところに流れているような動きがあるように思うんですね。なので、できたらその高等部をもう少し、職業訓練に特化するのではなくて充実させる。普通の通常学級の子たちが中卒、高卒で就職する子少ないですよ。それと同じように知的障害のあるような、いろんな障害持ってる子たちも長く、ゆっくりと学べる。そういうふうな方針で支援学校や、この高等部や専攻科の教育を構築

するという方針を持っていただけないかなっていうのも。大きな話にはなるんですけども、今中学校で支援教師をされていて思うことなので、是非お考えいただいたらと思います。よろしくをお願いします。

- (市) それも当然おっしゃるとおりで、昨日校園長研修で、進路が多様化していると。数も非常にそうなんです。中学校と小・中学校の特別支援学級を卒業した数は、この10年間で2.1倍。でも特別支援学校のほうは、1.2倍なんです。何で特別支援学校も2倍にならないのかと言ったら、進路、高等部は多様化しているのが実際のところですよ。おっしゃるとおり特別支援学校の高等部に今まで行っていた生徒たちが、進路の多様化に伴って通信制に行く。定時制に入る。サポート校が増えてきました。
- (組) そうですよ、はい。
- (市) サポート校も何かあったら、そういう子たちにとって高等学校卒業資格も通信制取って、プラスその子たちに応じたものっていうので、かなり工夫をして、で、今数が増えているのが実態なんです。私たち事務局がしていることは、そのサポート校にちゃんと見学に行かせていただいて、どんなカリキュラムで何をしているのかと今見ているところなんです。いろんな工夫されてるのは確かなんです。で、そこでも喫茶コーナーを開いて、特別支援学校の作業学習の喫茶のように、お客さん来ていただいて、接客サービスをするようなプログラムも入っているとこも増えていますので、多様化しているなというのは考えているところなんです。知的障害、肢体不自由とあるんですが、何が一番違いがあるか、小・中学校には自閉症で知的遅れのない子も入級できるけども、特別支援学校になると知的遅れのない自閉症の子たちが入級ができない。だから、その子たちの層をどうするのかっていうのが一番問題なので。私たちは今まで特別支援学校の高等部以降の就労に支援をしてきたところがあるんです。もう、それが一定コース制がしっかりできてきました。各校の進路指導もかなり力付けてきたので一定そこはもうできるんじゃないかと。だったら、これから力入れていくべきは中学校の特別支援学級と卒業した子たちの進路については私たちもちょっとしっかり考えていこうとしてますので、すぐに学校できますというレベルではもちろんないんですけども、中学校卒業した生徒にとって、いい進路になるのかっていうのは、私たちも問題意識持ってますので、今から考えていきたいと思っておりますよろしくお願いたします。
- (組) 通級の担当者を手厚くとか、そういうのはどうです、まだ余りない。
- (市) 先ほどおっしゃっていただいたように自分のいる学校で通級指導受けるという自校通級が令和2年度から設置を始めまして、令和2年度に小学校5校、そして今年度令和3年度は更に小学校10校に設置をさせていただいております。で、文科のほうに通級担当教員の定数化を今段階的に行っておりますので、それが令和8年度に完了します。全てが定数化になりますので、潜在数に合わせておおよそ今の計算では小・中学校合わせて100校程度に自校通級を設置するという方向で今準備を進めております。
- (組) 中学校のほう、ほんとに別室登校とか、すごく増えていまして、他校に行くと、その子の交通費とかでまた運営が大変なったりしまして。進めていただくようよろしくお願いします。
- (組) ちょっと別件で1個だけいいですかね。個別の指導計画に向けて話がかなり下りてきて、僕ら校内で勉強させていただいて、すごい大事かなっていう気持ちと、こういうできる

子たち、そのレベルはいろいろあると思うんですけど、やっぱり見ていてあげたいとか、いろんなことしていった方がいいなっていう話当然出てるんですけど、同時に、朝の会で例えば日付言ってるから算数的活動とかっていうことで算数だねっていう取り方をしていこうとかって話もしてるんですけど、例えば僕が今担当してる子、知的障害で強度行動障害だと多分思うんですけど、その教科をこう持つてくることによって、ほんとはその子は例えば情緒の安定とか、他害しないっていうことが最優先で、そこにやっぱり視点をもっと持って行ってやりたいなっていうところに教科をどうしても入れないといけないうてなると、ちょっとやっぱりぶれてくるところがあるんじゃないかなっていう気がしています。もちろん教科があってもいいとこたくさんあると思うんですけど、施策下ろしていってもらったときに、もうちょっと長いスパンというか、取りあえず1年目は、これぐらいちょっとやってみてとか、2年目はもうちょっとかどうかなっていう反応を見ていただきたいとか、現場のいろんなところで声が上がっていて、実際来てる感覚としては、とにかく全部教科やっってくださいって感じで来てたんですね。言われた方とその伝え方でどこかに齟齬があるのかもしれないですけど、もうちょっと現場とすり合わせていって、長い目で見てやっていただけたらすごくうれしかったなという、意見としてかなりあります。その点またちょっと教えていただけたらと思います。

- (市) 小学校は2年前から、中学校は去年から、で特別支援学校は来年に向けて、去年の3学期から各校の代表に集まっていたいただいて、検討重ねて、各校でも研究をしてもらって今に至っているんですけども、私の感じから言ったら各校でちょっとかなりばらつきがありますね。例えば新設になった灘さくらですね、かなりもう新しい学習量に基づいた教育課程を、友生と青陽灘、東の先生が集まってされてたんで、ちょっと東のほうは進んでるんです。青陽須磨、それからいぶき明生、新設校ができるというタイミングじゃなかったんで、ちょっとこう温度差ができていいるの確かなんです。なので、なかなか同じように進むのは私たちも難しいかなと思うんですけども、でも各校の中心になっている先生方が自分の学校で何ができるだろうかって視点でされてますので、来年度については須磨としてできること、大事なのは先生が今おっしゃったように朝の会で数字扱うことをやりましたと。算数という意識で、その朝の会やったときに、この子の1か月前と1か月後、こんなふうに数の捉え方違ったと。この子はきっと3か月前までは、1、2、3の認知があったけども、確実に3か月後なったら6までこの子ちゃんと言えると。しかも前は指が動いてたのが指なしでも、こう首がうんって言うようになったと。というところで、この子の算数の力って、国語の力って何だろうかっていうのを絶えず頭に入れていただいて子どもを見ていただきたい。そういう視点を持っていただきたいのが一番大事なところなんです。この子にとってのほんとの国語の力って、算数の力って今どこなんだろう。それは履歴シートがあると思うので、あれを見て、今この子ここのやな。じゃあ次に段階としてできる力これか。じゃあ、これができるのは、いつかがちょっと様子見とこかっていうふうにしていただいて、今まではそれさえもなかったんで。ボーリング転がして1、2、3数えたら算数しました、だけで済ませていたと思うんですけども、そうではないところに意識を持っていただくというのが、肝と思っていただいて、できる範囲で取り組んでただけるとお思いますので、よろしくお願ひいたします。

- (組) 確かに、すごく今説明いただいてはっきりしたところあるんですけど、やっぱり1割か2

割の子は、どうしてもその。

(市) 自立活動中心ということですよ。

(組) そうです。やっぱりこの子は自活だよって、情緒安定だよ、というところが、転任した人にとっては、ちょっと伝わりづらくなるのかなと。評価っていうのは、こう全面に出てくることで、その同じ子は大丈夫だと思うんです、その、そこが何か、今はその視点を持ち込みたいからそう力入れているってのは、何となくそう思ったんですけど、そういうところもフォローしていただけたらすごくうれしいなど。

(市) 了解です。

(組) ありがとうございます。

(組) 教育日本一の町に神戸をするんだっていうスローガンで今まで8年、9年やってきたわけですけど、その教育日本一っていう概念っていうんですかね、何がどうなったら日本一なるのかっていうところ辺、曖昧でずっと来ているような気がするんで、教育日本一と言ったら何か聞こえはすごくいいので、深くは考えずに来たんですけど。何を日本一にしようというふうに思っているのかっていうのね、ちょっとお聞きしたいなと思うんで、そこから話を進めていかせてもらいたいと思うんですけど。

(市) 私が必ず正しいお答えをできるかどうかっていうのは自信がないですけども、何か一つの尺度で日本一という手引きをするのは難しいというかできないと思います。いろんなことが今頭の中をよぎりましたが、まずは、やはり先ほど来お話お聞きしているとおり、もう先生方ほんとに、まずは児童生徒さんのためにというのが、もう第一だと考えてらっしゃると思うので、その子どもさんたちにとって、神戸市が教育日本一だと言えるようになるためには、今例に出された学力というのも非常に大事だと思いますし、体力も大事でしょうし、何かこう精神的に感じる幸福度、それを数値化できるのかどうかは別として、そういったものも全部必要でしょうね。で、じゃあ、児童生徒だけがよければいいのって言うたら、やはりそれを支える先生方の勤務環境というのも当然大事ですし、御家庭で言うと保護者の方々の満足度というのものもあるでしょうし、学校を取り囲む地域の皆さんにも御納得いただけるように、それらを全部ひっくるめた上での考え方だというふうに私は理解してます。

(組) 僕もそのように思っていました。学力だけじゃなくてね。やっぱり働いてる僕らも神戸で仕事したらすごく楽しいんですよ。子どもらも生き生きしてて、ほんで、教えたなら教えた分だけ子どもたちが伸びていくのが目に見えて分かるんだ、みたいな職場で毎日働いていたらいいなと思います。そんで、そんな職場やったら採用試験に応募してくる人も増えてくるでしょうし、教育委員会の皆さん中心に僕らがそれをしっかり支えて神戸の教育が進んでいくようになるといいかなとすごく僕も思って、言ってくださったのをお聞きして、一緒だなと思いながら聞かせていただきました。

そうなるためになんですけど、やっぱり、僕らは子どもたちの1クラスの人数っていうのが、やっぱり少なければ少ないほどいいと思っています。去年コロナの休校があって、その中で分散登校やったんですけど、分散登校やったときのことが、もう1年以上経ったんですけど、まだ僕ら心の中に残っていて、あのときはよかったな。午前、午後と2回しなくてはいけなかったりとか、そのめんどくさい部分もあるんだけど、でもやっぱり一人一人の子どもの顔がよく見えて、一人一人に手厚く、関わっていったからよかつ

たなど。あの後、僕若葉学園なんですけど、若葉学園で7月に8年目の先生方の8年目研修があったんですけど、そこで僕もちょっとそんな話をさせてもらって。若葉は1クラスが5人とか6人だった。多いところでも8人ぐらいなので、コロナのときも普通どおり営業していましたよ、みたいな話をして、お話を20分ほどさせてもらったんですけど、で、そのときに参加してくださった方が、みんなアンケートを書いてくださって、そのときに100人ほど来られてましたけど、もう8割以上の方が、少人数学級がいいって言うて。先生方みんな少人数学級がいいと思ってるんだなというのは、実感したわけなんですけど、35人学級を国は段階的に数年かけて小学校はやるんだって言うてるんですけど、政令市の中で35人学級やれてない。中学校やってないというようなところは、もう神戸と大阪と堺と3つだけになってますね。神戸ができないのは何でなのか。それから教育日本一やってスローガン掲げてるのに、何で神戸は国のとおりしかないのか。現場の様子を聞いていただいて、見ていただいて、物理的に難しいことたくさんあるんだとは思いますが、是非神戸独自でやっぱり少人数学級、とりわけ中学校1年生には進めていただけたらなと思います。県も実際どうするかは、はっきりと分かりませんが、中学校3学年の中でどこか1学年は35人にしてもいいよ、みたいな話が、会議の中で議題になってきているような話をちらっと聞いたりもします。実現するかどうかわかりませんが、県がやるって言うてるのに神戸ができないっていうのは、県より先に是非神戸で中学校実現させていただけたらいいかなと思うのが一つです。

(市) 少人数学級のほうが、やはり先生方から見て、児童生徒さんに対しての目の届き方がより細やかになるというのは、これは間違いなことだと思いますし、私自身、生徒の数が5人変わるだけで、こんなにも景観が変わるのかというのは、如実に実体験としてはありますので、もう皆さんがおっしゃってることは十分に理解できますし、やはりそれは間違いなことだと思います。

で、全国的な比較の中でも指定都市の中で、市独自の財源として取ってるというところも確かにあるというのは聞いておりますし、それが望ましいというのも確かに一つ考え方としてはあると思います。先ほど来、教育日本一とは何かと出てるんですけど、例えばこの少人数学級とか、こういったことに特化して財政措置を取るということをやれば、直ちにその指定都市の中で一番ということはあるかもしれないですけど、いろんな場面でかなり大きな額の予算措置が必要になってくるということですよ。やっぱり学校施設が非常に老朽化している。それから今はICT化の対応もあります。当然その教職員の皆さんの人数の話がある。そういったさまざまな要請に対してバランスよく対応していく。これもやはりその日本一のためには必要なことだと思います。それを考えるとやはり二足飛びに35人学級を実施していこうということになると、やはり財政負担というのは相当生じてきます。

それともう一つ、これは私毎年申し上げていると思うんですけども、仮にその教員定数を増やす、採用者数を増やすということをした場合。ありがたいことに募集人員を上回る応募がございます。その中で、採用させていただいておりますので、物理的に合格者数増やすということは可能ですけれども、やはりその大切な児童生徒さんの指導してもらおう先生でありますので、やはり教壇に立ってもらおうにふさわしい、将来的に十分に教壇に立ってもらえる方を採用させていただいておりますので、そういったバランスを考え

た中で今こういった対応をさせていただいてるところです。

(組) 分かりました。子どもたちが、学力も上がり、幸せ感も感じられるような学校生活や、学校卒業した後の生活ができるような支援をするためには、できるだけ早いことしてもらえたほうがありがたいかなと思いますので、是非御検討お願いしたいと思います。その次なんですけど、休暇制度の拡充を早急に行うことっていう内容なんですけど、この辺りの制度については、市労連の交渉事項だというようなことで回答いただいているんですけど、やっぱり僕らが生き生きと働くためには、モチベーションが必要やと思うんです。県の時代は子育て休暇で自分の子どもの音楽会を見に行ったりであるとか、卒業式に出られたりとかするようなことがあったんです。で、今年も県は、修学旅行とか自然学校の説明会も、その子育て休暇を使って参加してもいいよっていうようなことを拡充したように聞いています。で、神戸は、休暇は子の看護のためだけ、学校の行事なんかには、それは使えないということになっているんですけど、子育て休暇の制度使って学校の行事に県と同じように出てもいいよっていうようなことを言っていただけたら、モチベーションが上がって、やる気も出てくるようなところがあると思うんです。これするのに、そんなにお金掛からへんと思うんですけど、だから県は給料下げるときに、こういうの拡充してってことでやってきたみたいで、こういうお金が掛からへんところでね、ちょっと僕らのやる気を引き出してもらえるようなやり方っていうのは、あってもいいんじゃないかなと僕は思うんですけど、いかがですか。

(市) 子育て支援に関する休暇制度に関しては、もう毎年強い御要望をいただいておりますし、年々県のほうが制度の拡充を図っていると聞いておりますので、差が開いていっているのかなということで、その辺りは問題意識として強く捉えております。先ほど採用の話にもありましたけども、実際にこれから教員を目指そうという方々にとっても、現役の先生方以上に興味を持たれているところもあるかもしれませんので、我々としても非常にそこは重要視しているところです。これは、先生方だけに限らず、我々一般行政の職員にとっても当然重要なことですし、市長御自身がやはり子育て支援というのは非常に重く見られていますし、当然教育現場を束ねる教育長としても重要視されてる分野でもありますので、我々としても学校現場の皆さんのお声というのは重く受け止めて、きちんと行財政局にも伝えているところがございます。引き続き伝えていきたいところです。有給休暇も十分に取りにくいというお声も確かに聞きしていますので、特別休暇であれば、やっぱり職場的にも取りやすいのかなというような、皆さんのお声だということもありますので、そういった状況も合わせて強くお伝えしてまいりたいと思います。

(組) 教員は、市の職員の中で結構な割合を人数的には占めると思いますので、そこを変えてもらったら喜ぶ人たちが増えて、雰囲気も変わってくるんじゃないのかなと思います。是非よろしく願いいたします。

教職員の異動については本人の希望と納得に基づくものにする事っていうことで、これも管理運営事項ですが、細かいそれぞれの先生の希望をしっかりと校長先生がまとめてくれると思うんですけど、子育て中の先生方もあって、朝保育所なり送り届けてから職場に向かわないといけない先生方もあります。そんな細かいところもしっかり聞き取っていただいて、うちの組合員の中にも職場とは反対方向にまず保育所行って、そこからまた職場に来なくちゃいけないなくなっちゃったっていうような先生の話も聞きます。断つ

たかも大変なことになるかもしれんから、よう断らんかったんやけどっていうような話も聞いています。ですから、細かいところを聞いてやっていただいて、しんどいことなく働けるように僕らの気持ちや生活の様子を聞き取っていただけたらと思います。

今、大きな苦情とかは聞いてないんですけど、そんなことが今後ともないように是非お願いしたいと思います。更に、こちらの意見を校長先生に吸い取ってもらって、教育委員会でもそれはよく、ちゃんとしていただけるようお願いしたいと思っています。

(市) 人事異動のやり方というのは、大きく変わったわけですけども、その趣旨については皆さんもよく御理解いただいているかとは思いますが。今書記長からもおっしゃっていただいたように、お一人お一人の御意向であるとか、もちろん健康状態もそうです、それから今に例に出された育児、介護、そういった御家族の状況もあるかと思えます。そういったさまざまな情報を、まず御本人から直接書面できちんと丁寧に集約させていただくということが、まず一つです。それからもう一つは、教職員の皆さんのキャリアプラン、経歴とかも全部勘案した上で、どういったキャリアを描いていただくべきかとか、あるいは各学校園の運営のビジョンというのもあるかと思えます。当然皆さんの御意向とか、そういった状況を最大に重んじるっていうこともそうですが、最終的に全体として一番いい配置というのを考えていくということにはなってくるんですけど、当然やはり、全ての方が100パーセント納得いくという形にはならない場合もあるかと思えます。それをできるだけ100に近づけていくということを、頑張っていくしかないと思いますので、今までもそうですが、各校園長の先生方を中心に御本人のお考えをきちんと把握させていただくということが大事だと思いますので、まずはそこを丁寧に進めていきたいと。

(組) ありがとうございます。

(組) ちょっと特別支援課でも言いたかったことなんですけど、中学校の特別支援学級の担任は、今とってもややこしくなっていて、人事でどう動かされるか分からない。来年いられるかどうか分からないという担任が多くてですね、ものすごく運営で困ってるんですね。

私たち研究部でブロック作って話し合ったりするんですけど、あるブロックでは、半分近くが今年初めて支援学級の担任しましたっていう人とか、あるブロックでは、何人ものが今年1年限りの約束でみたいな話があったりします。

で、中学校は教科の縛りがあるので、私なんかもそうですけど、この教科がないから、支援学級の授業だけでは困るとか。この教科の人は少ないから支援学級の担任は本人の希望があっても任せられないとか、そういういろんな制約があるんですね。

で、ほんとに特別支援の教育は継続性がとても大事だと思うのに、そんな初めての人ばかりとか、今年だけでいいみたいな人事がされているっていうのに、とても危惧を持っています。以前もあったんですけど、やっぱり新しい人事方式になって、担任をしている人が、自分が続けられるかどうか分からないっていうような状況があるみたいなんですね。今課長さんが言ってくださっているような方式だったら少し落ち着くんじゃないかなと思うんですけど、どうもそうもなっていないみたいで、それはやっぱり学校の中での教科の人数に余裕がないからなんですね。で、支援学級の対応していても教科として数えられてしまうんですよ。支援学級の責任を持ってたらそんなに正常学級に行っ

てられませんよね。どっちつかずになってしまいますので、そここのところの、教科の縛りを外すような、そういう人事配置というか、この教科の人欲しいんだけどその教科の人が来ないのでとか、もらえるかどうか分からないからっていう形でものすごく苦勞していて、やっぱり結局人員なんですよね。人手なんですよね。お話とてもよく分かったんですけども、やっぱり人手が足りない。もう一人欲しいっていうのが、ほんとにどこの職場の人でも、どんな学年の人と話をしても出てきます。もう一人余裕が持てるような人事配置が必要なんだということを、ほんとに考えていただいて、余裕を持てるような人事配置をほんとに強く要求したいと思います。

(組) それと関わって一緒にいいですか。副委員長の〇〇です。業務改善で何が一番大事かってやっぱり人手なんで、やっぱり人の数が増えないかぎり、仕事の量が減らないっていうのも我々の実感なんです。

で、業務改善だけじゃなくって、今やっぱりすごく深刻だなと思うのは、学校現場ってほんまに教員の頑張りで辛うじて成り立っているけれども、それがもうほんとに崩れ落ちていく。ほんまに学校が崩壊してしまうような状況って、結構あると思うんですね。定数法にやっぱり縛られてしまうから、採用の数を減らさないといけない部分であるとか、退職者との均衡とかいう分で今まで採用していたのも分かるんですけども、やっぱりその年その年の退職者、あるいは新卒者のいっぱい取れる年、取れない年ということをやったが故に、各職場に今年齢ごとのいびつな状況が生まれ、東須磨の事件が起きたときに、そういったことも原因の一つだったのではないだろうかっていう分析もありましたけども、そういういびつな状況が各職場に今あって、それが非常に問題なってるというところは、いろんなどこであると思うんですね。産休・育休が大量に生まれ、臨時講師を大量にそこに投入しないと学校が回らない状況であるとか、管理職が年度途中に変わるというのが今年度も何度かありました。教頭が複数配置になっている小学校とかありましたよね。あれっていうのは、そういうふうな事例が起きたときに、そこに配置できるという考えでもともと配置されていたとかですか。

(市) 単純にどういう目的でということの説明するということではできないかもしれませんがけれども、決して他校の補充のためにというような目的というよりは、やはり、とにかく高等学校なんかは、教頭の複数配置があるんですね。生徒数が非常に多い、いわゆる大規模校で教頭の業務が非常に一般の規模の学校に比べて過大な学校において、教頭複数配置というのも一つの考え方としてあるということで私自身は理解としておりますし、そのように考えていただいてもいいと思います。

(組) と申し上げるのは、要するに管理職が休む。人間ですから休むという状況の中で、学校運営がやっぱり滞るというところで、そこに誰かを入れなければいけない。管理職もそうですけど、我々担任もそうなんです。で、これは神戸市だけじゃなく全国みんなそうなんですけれども、要するに誰かが病欠、あるいは、途中で退職するっていう状況、これはもう予想できることです。そのときに、そこに補充ができないと。で、今は総務学習担当がそういった場合にまずはあてがわれるという状況が現場の中ではありますけれども、総務学習担当は学校の中でいろんな分野でリーダー的な役割を持ち、その人がいなければやっぱり学校は回らない状況っていうのがある。で、その人が例えば空いた学級の担任になってしまうと、結局学校全体がしんどくなるんです。これはもう当たり前前

のことで、いつ誰が欠けるかもしれないという状況のときに、誰も来てくれない。で、そこから生まれた臨時講師という一つの制度がありますけれども、私が臨時講師をしてた時代には、時期によっては口がなくて、私は半年仕事がなかった時期がありました。だけど、今はそういうことがなくて、もう慢性的に足りない状況ですよ。行く人がいない状況で、じゃあ誰が行くというときに、あるところは教頭が入り、あるところは生指担が入りとかいう、ほんとにかつかつのところで回しています。で、先ほど私が、教頭複数のところで、そのままスライドできたというふうなところをお尋ねしたのは、これは管理職だけじゃなくって、加配っていうものを置かないと、ほんとに何人かが倒れてしまったら、ほんま学校が回らない状況なんですね。そこを踏ん張ってやっているとか、ほんまは回らないものを無理やり回している状況があります。で、これはやっぱり子どもたちにも返ることですし、ほんとに一つ間違ったら学校全部がこけてしまうような状況が、恐らくもう教職委員会さんもつかんでいると思いますけれども、そこに大量の若い臨時講師の先生が入ったりとか、そこからまた教えていかなあかんで余計こう大変な状況が生まれているとか、いろんなことがそこに引き起こってるので。結論から言うと、やっぱり採用を考える際に、加配を増やしていただきたい。国の定数法で無理な部分は、神戸市として独自に各校にプラス1の加配を付けるとかという形でやっていただかないと、いつまで経ってもこの状況は変わらないと思っています。その辺り、いかがでしょうか。

- (市) 切実な状況をお聞きしてる中で私自身が普段から感じていることを率直に申し上げますと、まず学校現場の先生方の今の業務について、当然その業務改善の分野である程度、勤務時間を縮減できる部分というのも当然あるかとは思いますが、一方で、全教の皆さんには、特別支援学校や特別支援学級で従事されてる方もおられるので、特によく当てはまると思うんですけど、お一人お一人の児童生徒さんへの対応の個別化・多様化、きめ細やかな対応が恐らくこの5年前、10年前と比べるといろんな分野で保護者からのニーズも高まっていると思いますし、その意味での業務っていうのは、なかなかこれは何らかの工夫とかで縮減できるという部分ではないと思いますので、その辺りは率直に業務の増加、困難化、複雑化という面で体制を考えていく必要があるというふうに私自身も考えています。

それからもう一つは、これはもう率直にお詫びするしかないですけど欠員の発生ですね。年度の中盤以降になると、もう必ずどこかの学校で欠員が常に生じている状況です。これに関しても、採用試験で残念ながら正規採用にならなかった方に対して、すぐに声かけをして、臨時講師の登録をしてもらって、ちょうど私の後ろ側の席に教員OBの方が座ってらっしゃって、もう毎日ひたすらそれを対応されていますので、私自身もどれだけその声かけをしてもらってるかというのは身にしみて分かってるんですけど、そういった形で、できるかぎり欠員を発生しないようにという努力はさせていただいてるところですけれども、一方でメンタルヘルス不全の休職の方がかなり多いというのが事実でして、私自身やっぱりそこが一番問題かなというふうに考えています。当然加配の工夫とか、今御指摘いただいたことももちろん重要な御指摘ですし、対応していく必要性というのは当然あるんですけども、本質的な部分で言うと、そのメンタルヘルス不全で休職される方による欠員というのをやはり減らしていくということが一番大事だ

と思っています。それが学校園全体の運営上も一番安心して進められるところですし、そうやって休職に入られる方が少なくなればなるほど、やはり望ましい形だと思いますので、今どうやったらそれが対応できるのかというのは、非常に悩ましいところですけども、まずはそこを真摯に考えていきたいと思っています。

(組) ほんとに、僕らも知ってるベテランの先生がちょっとしんどいから休むんやっていう話をちらっと聞いたりすることもあります。その職場の働き方っていうのが、そんなベテランの先生でも心が折れてしまいそうな状況の現場があるっていうことなんでしょうね、と思うんですけどね。僕らもいろいろ話は聞かせてもらったり、組合として、そういう悩んでは先生方が電話掛けてくださったりすることもあるので、聞いたりすることもある。働きやすい職場にするためには、本当にどうしたらいいのかというのを、やっぱり残業時間を減らすようなこともそうでしょうし、その子どもにどう対応していくかっていうような、どうやって職員みんなでチームになって働けるかというようなことだったりとか、そういうことを考えていかないといけないのかなと思います。人事評価の問題なんかにしてもね、誰かのボーナスが上がって、競争して頑張った者が得ることなるんだ、みたいな、そういうところがね、やっぱり教育委員会の中にもありますでしょ。そういうところ辺がね、やっぱり職場をぎすぎすさせてるような原因の一つにもなってるような気がするんですよ。競争させて先生らの質が高まるのかっていうたら、そうじゃなくて、やっぱりそうやって心が折れてしまうような人が増えてきてしまっているんじゃないのかっていうようなことを僕らもちょっと危惧したりする部分もありますんで。やっぱりその辺りで、働き方の制度、そもそもやっぱり考えてもらって。教員も人事評価で競争させる、それでみんなよくなるんだ、いうことではないような気がするんですよ。神戸だけで話をするような問題ではないのかもしれないですけど、やっぱりそうやって働き方、子どもの見方をするのかっていうのは、これから本当に考えていかないといけない。ますます深刻なところへ入ってしまうんじゃないかと思ひ、そこにまたパソコンが入ってきたりすると、ますます僕らの仕事はどうなってしまうのか。データ教科書で、スタンダードなことしか教えられないって僕らのその属性とか専門性みたいのが、ほんまに削られてしまったりするって、ますます何かやりたいことがやれなくなって、この仕事面白くないなって言って、辞めてしまったりするような先生方が増えて、それこそまた人が足りない状況になるような世の中にならへんかなと思って僕ら心配しています。そんなことを含めて、一緒に考えていかせてもらいたいかなと思います。

(組) 加配を増やせっていうのもあったんですけどね、やっぱり欠員が多いですね。本校でも、今欠員があって、育休代替の人が講師で来たんですけどももたないということで辞めちゃったので、総務が代わりに入っていたんですけど総務もほんとに不登校の子どもたちを抱えていて、ずっと見ているし、学級内でもちょっと大変な子とずっと関わりがあるので、どうしても1日のうちの2時間は空きが欲しいと、その人に関わるために。その2時間をどうするか言うと、学習支援の人を二人ほど当てて、教科担当にするってことで、でもその学習支援の人も週2日とかなのに、授業持つとなると打合せもいりますから、毎日7時回って何時間勤務してるのかっていう状況でやっています。去年も、本校そ

ういう状態やったので、そういう勤務をして体を壊して今病院通いしながら、しんどい言いながらも、やっぱり自分が見ないといけないからいうことで、酷使されてるんですよ。加配がなければ、現場にいる短時間で勤務してる人に無理を言って長い時間働かせて、それで何とかその学級を持たせてるという、そういう状況が本校については、2年連続ですね。前の勤務校でもそうでした。その前の学校でもそうでした。3か月間3人いなかったとかね。もう、それがどこの学校に行っても毎年あるんです。そういう個人個人無理をさせて何とか今の学校がもってるという状態なので、それやっぱり何とかしないと、もうみんなが倒れてしまう。加配を増やすって絶対に必要だと思うんですね。その中にいる人でやると無理が来る。ほんとに体壊してるんです。壊しても責任感があるからやってる。みんな倒れちゃうんじゃないかなっていうので、何とかしてください。現場の一人一人の命が掛かってる。もう絶対に何とかしないと教員がみんな本当にしんどい。で、そういう話をしたら、うちもそうよって言って友達が言ってましたけど。そうです。どこでもそれです。もう、ほんとに60歳越えた人にまで無理をさせる。若い人にもっと無理させる。中堅にも無理させる。ベテランに無理させる。全部が無理して、そりゃ、メンタルヘルス不全増えるのは当然です。やっぱり、まずは加配を増やす。それから、メンタルヘルス不全の人を減らす。それないと、もう無理です。現場はほんとに。どこの学校に聞いても全部言います、欠員は。ほんとは欠員じゃなくて、そこにそのお金払っているわけですよ。他の人雇って。だからお金が浮いてるんですよ、実際。お金を使わず何とか学校を運営させてる状況もひどい。ブラックもいいとこで、そんなところにいい人が来るわけじゃないですよ。先ほども、定数増やせばいいっていうけれども、その質の確保が難しい。つまり、増やしたら質が確保できないということです。県でも定数よりもあったんだけどどうしてもその人取れないから定数減で配慮したと。それだけ質が落ちてるってことやからね。そら来ませんよ、誰も。人を増やしたくても、質を確保できるぐらいの応募する人がいない。やっぱりこういう働く条件を何とかよくしてください。

(組) 僕らが何か面白そうに働いとったら、採用試験受けたいなと思う人も増えて、それで倍率も増えて、で、その中から、この人はという人を選びやすくなるんじゃないのかなと思って。僕らが、面白く働いているなって、歩く広告塔、働く広告塔になりますので。

(組) すいません。副委員長の〇〇です。港島学園に勤めております。発出文書がどれぐらい出ているかというのを、教育委員会のほうも把握してますってなってるんですね。で、先月ぐらいにPDFはダウンロードしなくても見ることができるというふうになったと思うんですが、あと、もう1個やってほしいことは、ファイル名、例えば資料1とか、添付なんぼとかってやられてもダウンロードしてるからダウンロードファイルがむちゃくちゃなってる。ほんで、僕も生徒指導部の立場なので、大量に送られてきていて、一旦目とおしてるんです。で、一旦ちょっと保存しとこうと思って保存していても、どれがどれか分からない。何の添付なんかも分からない。結局は、それを開けてみて、これちゃう、これちゃう、みたい。日々結局そのファイルを見返すことに、すごい時間が割かれてしまう。全部をPDFにしろってのもなかなか難しいのは分かるんですけど、そのファイル名もなにか工夫をしていただいただけで1日、ただその開けたのを見るのは1分なんかもしれない。でも10個の資料を見ると、そこで10分みたいなことがた

まっっていく。で、それ見てる間に、また電話が鳴るんですね。みたいな感じで、ちょっとした業務改善かもしれないけど、大きな業務改善につながるのではないかというふうには私は思っています。間違いました、もう一回送られてくる、そういうことがあるのは人間なんで仕方ないとは分かっていますけど、せめてそのファイル名の統一みたいなことはできないんでしょうか。

(市) おっしゃってることは一般行政でも全く同じ感覚なので、もう十分に理解できる場所ですし、今少しでも見やすく、短時間で要衝を把握していただけるようにということで、できるだけ改善を図らせていただいているところです。どれが一番分かりやすいファイル名かっていうのは、少し意見は分かれるかもしれないですけど、例えば、日付であるとか、テーマ名をできるだけ短くということで、今一定の工夫はさせてもらっているところではありますけども、引き続きどうすれば受け手側にとって少しでも分かりやすくなるかということ、事務局全体でも工夫を図っていきたくて思っております。

(組) それはもう切に願いたいことです。たったそれだけのことと思われるかもしれないけど。

(市) それは思いません。私も全く同感です。それは身をもって共感できる部分です。

(組) 今の話を聞いて、聞きたいことが1点と、もう1点別件にて質問させてください。

メンタルヘルス不全が多かっていう話をされていたと思うんですけど、その原因は分析されてるのか、これからするのかっていうのが1点ですね。

で、もう1点は、今の教職員ってトップダウンで下りてきたことをこなすので精一杯なんです。そうすると実際は自己決定しているんじゃないかと、言われたことをこなすって仕事になってると思うんですね。で、そうすると自己有用感って失われていって、メンタルヘルスっていうところに至るかと思うんで、是非検討していただきたいと思えます。もう1件全然別件なんですけど、僕が一般校にいたときに、教頭先生と校長先生に聞いて分からなかったことを教育委員会の方に電話したことがあるんですけど、そのときに、必ず管理職の人から電話するようにしてくださいっていうことを何回か言われたことがあるんです。教育委員会に質問する際は、必ず管理職から電話しなきゃいけないみたいなルールってありますか。

(市) まず今のお問い合わせに関してですが、私が承知する範囲ではないかなと思います。

(組) 業務改善の視点として、僕がそのとき困ったのは、校長先生も教頭先生すごい忙しいんですけど、このことでちょっと電話してもらえないですか、ちょっと待って、これ処理したらやるわっていうの何回もやってもらって、で、教頭先生から電話してもらって、うちの〇〇がこういうこと聞きたいんですけど、今電話代わってもいいですかっていうの何回もしてもらったんですよ。で、それってすごく無駄だと思うので、もしできれば教育委員会さんのほうから周知徹底して、そういうことをもししてる人がいたらやめてくださいとか、そういうことをしていただけないでしょうか。

(市) 例えば、極めて重大な事項に関してであれば、場合によっては管理職の方からというケースはあろうかと思えます。ただ、個々の対応でお問い合わせいただくという場合には必ずしもそれは当てはまらないというのが私の認識です。何かの折に触れてそういうことをお伝えできればというのがありますけど、一方で必要最小限の通知に限りたくないという考え方もありますので、出し方については検討させていただきたいと思えます。

(組) はい、是非よろしくお願ひします。

(市) それと、メンタルヘルス不全の分析ということですが、まだ十分に客観的な検証なり分析というのはできておりません。あくまで推測の話にはなりますけども、ずっと高止まりの状況が続いている中で、近年で言うとやはり新型コロナの対応というのは当然見過ごせない要因だと思っています。皆さん共感していただけると幸いですし、皆さんお一人お一人が、正に経験されたことだと思いますけども、今までに前例が全くなくてですね、私も事務局としてもほんとにどうしたらいいかというのが、なかなか分からない状況で、かなりお知らせについても急に発信したりとか、急に変更したりとかっていうことも多々あったかと思っています。やはりそれによる精神的、体力的ストレスというのは、一般の先生方も含めてほんとに計り知れないものがあったと思いますし、その部分はかなり影響してるのかなと。そしてまた学校が通常再開した際にも今までの分を取り返すかのように、かなり学校行事もイレギュラーな形で詰まったと思いますので、その辺りは、お一人お一人の先生にかなり負担は掛かったと思いますし、なかなか少ししんどいなと思ってる職員の方おられても、周りからのフォローっていうのも余り正直いつものようにはゆとりがなかったんじゃないかなっていうふうに考えています。

そういったこともありますし、先ほど欠員の状況について具体例を出しておっしゃっていただいていたけども、特定の学校だけじゃなくて、極端に言えば、もうほとんど全ての学校がそういうイレギュラーな状況を前提に運営されてると。で、それがメンタルヘルス不全につながって、ずっと悪循環になってるというのは、もうほんとに今の具体的なお話の中でも改めて私も痛感したところです。直ちにその加配を増やすとかいうことはなかなか申し上げられないところですけども、この数年でも先ほど申し上げた個々の生徒さんへの対応の個別化、多様化、複雑化というのもありますし、社会環境も非常に複雑に変わってきていますし、その中でメンタルヘルス不全という非常に悩ましい課題が膨らんできているということもありますので、それらも全部総合的にとらまえて考えていきたいというふうに考えております。

(組) よろしくお願ひします。

(組) 新規採用の人を一生懸命つなぎ止めていただいている努力というのは、とても感じていただいて、私たちが知っている受験者の方も採用にならなかったけどすぐ連絡があったとか、すぐ呼ばれた人とか、急な妊娠で産休が決まったけれども、すぐ新しい方来ていただけたとかいう、いい例もあるので教育委員会の方が人員の確保に努力していただいていることは重々分かっておりますけれども、もう一步、たくさんの方を雇う工夫をしていただきたいし、やっぱり職場が魅力的でないとう優秀な人材が集まってこないと思うので、ほんとに魅力的な職場になるために、いろんな施策や、お給料ももちろんそうですし、働きやすい職場、ゆとりのある職場を作っていただきますように、なお一層よろしくお願ひしたいと思ひます。

(市) ありがとうございます。

(組) 今後ともよろしくお願ひします。